

第 19 回日本乳癌学会近畿地方会
教育セミナー

関西医科大学附属病院 乳腺外科
木川 雄一郎（きかわ ゆういちろう）

【乳癌周術期化学療法最適化】

乳癌周術期化学療法の目的は、微小転移を制御し、根治率を上昇させることである。その適応やレジメンに関しては、個々の患者の再発リスク、乳癌サブタイプ、患者の希望や有害事象発症リスクなどを総合的に判断し、患者と shared decision making(意思決定の共有)を行うことが重要であり、臨床医として高い能力が求められる。

本教育セミナーでは、以下の 2 症例において、主に術前・術後化学療法の選択およびレジメンについて、明日からの臨床に活かせるようなディスカッションをしたい。

【症例 1】

46 歳、閉経前、右乳癌、Bp+SN 施行後。

浸潤性乳管癌, pT1c(17mm)N0M0, ER 90%, PgR 70%, HER2 1+, Ki67 30%, Grade2

既婚、子供二人（15 歳と 10 歳）フルタイムの事務職

学びのポイント

- ・代替サブタイプ分類と化学療法の適応について。
- ・多遺伝子アッセイとその結果に基づく治療方針について。
- ・化学療法を行う場合のレジメン選択と副作用マネジメントについて。

【症例 2】

46 歳、閉経前、右乳癌、cT1c(17mm)N0M0

浸潤性乳管癌, ER 70%, PgR 50%, HER2 3+, Ki67 30%, Grade2

既婚、子供二人（15 歳と 10 歳）、フルタイムの事務職

学びのポイント

- ・術前化学療法を行うか、手術を先行させるかの治療方針選択について。
- ・レスポンスガイド治療の意義について。
- ・化学療法と抗 HER2 療法のレジメン選択について。